

昭和 23 年（1948 年）、アメリカ占領下で、日本が民主国家として再生への道を歩み出した時期に、日本を代表する大手新聞社である毎日新聞社が、「新しい時代感覚」を掲げて創刊した総合写真報道誌。

『毎日グラフ』復刻版 eISBNコード /価格一覧

※価格は全て同時 1 アクセスの価格です

	発行年月	配本回	収録号数	セット 構成巻数	eISBN	本体価格	税込価格
第 1 期	2021年11月	第 1 回配本	1948年7月1日号～1950年12月20日号	7	978-4-910667-82-9	140,800円	154,800円
	2021年12月	第 2 回配本	1951年1月1・10日合併号～1952年12月20日号	9	978-4-910667-90-4	184,800円	203,280円
	2022年1月	第 3 回配本	1953年1月1日号～1953年12月23日号	7	978-4-86759-000-3	140,800円	154,800円
	2022年2月	第 4 回配本	1953年12月30日1954年1月6日合併号～1954年12月22日号	7	978-4-86759-008-9	140,800円	154,800円
	2022年3月	第 5 回配本	1954年12月29日1955年1月5日合併号～1955年12月21日号	7	978-4-86759-016-4	140,800円	154,800円
	2022年4月	第 6 回配本	1955年12月28日1956年1月4日合併号～1956年12月23日号	7	978-4-86759-024-9	140,800円	154,800円
	2022年5月	第 7 回配本	1956年12月30日1957年1月6日合併号～1957年12月29日号	7	978-4-86759-103-1	140,800円	154,800円
	2022年6月	第 8 回配本	1958年1月1日・12日合併号～1958年12月28日号	9	978-4-86759-111-6	140,800円	154,800円
第 2 期	2023年5月	第 9 回配本	1959年 1月4・11 日合併号～1959年6月28日号	9	978-4-86759-146-8	140,800円	154,800円
	2023年5月	第10回配本	1959年7月5日号～1959年12月27日号	6	978-4-86759-153-6	140,800円	154,800円
	2023年5月	第11回配本	1960年1月3・10日合併号～1960年6月26日号	6	978-4-86759-160-4	140,800円	154,800円
	2023年5月	第12回配本	1960年7月1日別冊号～1960年12月25日号	6	978-4-86759-167-3	140,800円	154,800円
	2023年5月	第13回配本	1961年1月1・8日合併号～1961年7月臨時増刊号	6	978-4-86759-174-1	140,800円	154,800円
	2023年5月	第14回配本	1961年7月2日号～1961年12月31日号	6	978-4-86759-190-1	140,800円	154,800円
	2025年2月	第15回配本	1962年1月7・14日合併号～1962年6月24日号	6	978-4-86759-566-4	140,800円	154,800円
	2025年3月	第16回配本	1962年7月1日号～1962年12月30日号	6	978-4-86759-573-2	140,800円	154,800円
第 3 期	2025年4月	第17回配本	1963年1月6・13日合併号～1963年6月30日号	6	978-4-86759-580-0	140,800円	154,800円
	2025年4月	第18回配本	1963年7月7日号～1963年12月29日号	6	978-4-86759-587-9	140,800円	154,800円
	2025年4月	第19回配本	1964年1月5・12日合併号～1964年6月30日臨時増刊号	6	978-4-86759-594-7	140,800円	154,800円
	2025年5月	第20回配本	1964年7月5日号～1964年12月27日号	6	978-4-86759-601-2	140,800円	154,800円
	2025年12月	第21回配本	1965年1月3・10日合併号～1965年6月27日号	6	978-4-86759-661-6	140,800円	154,800円
	2025年12月	第22回配本	1965年7月4日号～1965年12月26日号	6	978-4-86759-668-5	140,800円	154,800円
	2025年12月	第23回配本	1966年1月2・9日合併号～1966年6月26日号	6	978-4-86759-675-3	140,800円	154,800円
	2025年12月	第24回配本	1966年7月3日号～1966年12月25日号	6	978-4-86759-682-1	140,800円	154,800円
	2026年1月	第25回配本	1967年1月1・8日合併号～1967年6月25日号	6	978-4-86759-689-0	140,800円	154,800円
	2026年1月	第26回配本	1967年7月2日号～1967年12月31日号	6	978-4-86759-696-8	140,800円	154,800円

★ 巻数毎のご購入も可能です。この場合の価格は24,200円＋税（税込26,620円）となります。
eISBNはホームページに掲載いたします。

＊専用試読サイトにて見本ページがご覧いただけます。

<https://kanae-ebook-0303.actibookone.com>

＊試読サイトでの閲覧機能と他の各電子書籍貸出サービス会社様の機能が異なる部分もある旨ご了承ください。

毎日グラフ 復刻版 全26回配本 電子書籍

解説 ● 奥武則（法政大学名誉教授 毎日新聞客員編集委員）

森暢平（成城大学文芸学部教授 元毎日新聞記者）

戦後グラフ誌創刊ラッシュの中心的存在である「毎日グラフ」。

その1948年創刊号から別冊・増刊を含めて順次刊行。

表紙を含めた全頁に本誌にない月号表示とページ数を付し、

電子書籍には便利なしおり機能も加え、用語検索も充実。

同一プラットフォームでは『国際写真情報復刻版』との横断検索も可能。

株式会社かなえ

〒171-0014 東京都豊島区池袋2-30-18-202 tel：03-6912-7238 fax：03-6912-7239

<https://kanae-book.co.jp>

info@kanae-book.co.jp

お問い合わせは、上記TEL番号かFAX番号、またはメールアドレスまでお願いします。

取扱店

【毎日グラフ】とは

1948年7月に毎日新聞社より刊行された写真報道誌。判型や刊行頻度を変え、誌名も「アミューズ」と変えた後、2001年に休刊。判型・経済から芸能・音楽・スポーツなどの幅広いジャンルを紹介し、グラフィ誌が競合しあつた時代においても、その斬新なレイアウトとペーソス溢れる文章で注目を集め続けた。

本書を推薦します（敬称略）

江川紹子

神奈川大学国際日本学部特任教授

時代の「記録係」としての役割を発揮する「毎日グラフ」

ジャーナリズムには、ふたつの役割がある。

ひとつは、社会の「照明係」。社会の様々な出来事や隠れた事実之光を当て、同時代の人々に伝える。それは人が考える材料になり、民主主義を支える。もうひとつは、「今」を記録し未来に伝える、時代の「記録係」としての役割だ。次の世代が過去を振り返り、様々なものを学んで未来を構築していく資料となる。

新聞の場合、日々の新聞発行のほかに縮刷版を作り、アーカイブ検索の機能を整えることで、このふたつの役割を果たしてきた。ただし、新聞は文字中心に時々々の出来事を伝える。また、社会のすべてを記録できるわけではない。

一方、写真を中心にしたグラフ誌は、事件事故のほか、芸能、風俗に携わる人々の人間模様、ファッションを初めとする流行を通して、主に昭和の時代の大衆文化や世相、出来事を写し取っていた。『毎日グラフ』もその一つで、様々な日常風景や、発行当時は新しかった道具や商品などの話題も収められていて興味深い。今回の復刻によって、このメディアは「記録係」としての役割を存分に発揮するだろう。

多くの大学や図書館に収められ、研究者や学生が未来にわたって、その記録に接することができるよう期待したい。

難波功士

関西学院大学社会学部教授

社会の諸相をヴィヴィッドに記録してきた『毎日グラフ』

かつて病院の待合室や銀行のロビーには、グラフ雑誌がおかれ、待ち時間の手持ち無沙汰を解消してくれていた。すべての隙間時間をスマホの画面に奪われている現在からは想像もつかない光景だろうが、さまざまな場所で実に多くの人々がグラフ誌のページをめくっていたのである。中でも、戦後いち早く1948年に創刊された『毎日グラフ』は、その時々にも多様なトピックスを取り上げ、幅広い読者に享受されてきた。1950年代に入り、テレビ局の開局ラッシュや週刊誌など雑誌ブームも起こったが、20世紀のビジュアル・コミュニケーションの歴史を振り返ってみたと、グラフ雑誌は一定の存在感を保ち続けてきたと言えるだろう。

社会の諸相をヴィヴィッドに記録してきたグラフ雑誌は、さまざまな研究領域において貴重な資料として利用可能なものである。この度の『毎日グラフ』の復刻によって、たんにメディア史研究にとどまらず、戦後日本の文化史・社会史研究において、さらなる進展や新たな展開がもたらされることを期待したい。

石田あゆう

桃山学院大学社会学部教授

戦後、メディアが創る「女性」イメージの変遷を知る貴重な資料

『毎日グラフ』が復刻され、当時の数多くの写真がまとめて見られるようになると喜んでいる。私は女性誌の研究をしているが、雑誌の表紙に掲載される女性は時代の象徴でもあり、眺めているだけでも楽しい。『毎日グラフ』も女性を表紙にたびたび起用している。戦後、「女性」を同誌がどのようなイメージで演出し、切り取ってきたのかを知ることができるだろう。

昭和20年代（1945〜54年）は、女性誌では写真に色を載せる多色刷り（多色グラビアと呼ばれた）が用いられていたが、昭和30年代（1955〜64年）には、より「リアル」な写真を用いた印刷への移行していった。視覚メディアとしての変化についても、「見る」週刊誌であった『毎日グラフ』であるから、戦後から高度成長期の誌面を眺めることで、私たちはより多くのことを読み取ることができるように考えると考える。『グラフ』という視覚イメージは、過去の世の中を私たちが想像する上で手がかりとなる資料である。全国紙である毎日新聞社が撮りためた数多くの写真によって編集された『毎日グラフ』は、日本や世界を記録した貴重なビジュアル・メディアである。

Martyn David Smith

Lecturer in Japanese Studies, School of East Asian Studies, The University of Sheffield.

Mainichi Graph.

As a historian of modern and contemporary Japan, I have found that the Mainichi Graph offers an invaluable window onto the social, political, economic, and cultural transformations of the 20th Century. The period of rapid economic growth from the 1950s to the 1970s, saw Japan recover from defeat and occupation in 1945 to become one of the largest economies in the world. This was also the period of the rise of the middle-classes, protests against the US-Japan security treaty, protests against the Vietnam War and the hosting of the first Olympics to be held in Asia in Tokyo in 1964. The Mainichi Graph is an authoritative visual guide to these events, often featuring English commentary. For my own work on the Japanese media and consumerism in the postwar period it has been extremely useful as a resource through which I can reconstruct and better understand the transformation of the everyday lives of the Japanese people. It can be difficult to access historical news media resources from outside Japan but, as a researcher working on Japan in the UK, online access to the database allows me to make use of the Mainichi Graph easily and conveniently in my work. My current research looks at the history of sound recording and consumerism in Japan and easy access to the Mainichi Graph is essential to this project. It is a useful and exciting resource for scholars working on Japan and East Asia around the world, and digital access means it is now even more convenient.

